

◆ 人生を生ききる ◆

映画『アマデウス』に描かれるモーツァルト像はかなり脚色されているようだけれども、使われている彼の多くの曲がこの映画に彩りを添えている。冒頭、疾風怒濤のような“25番ト短調交響曲”、サリエリがモーツァルトへの嫉妬をあらわにする場面で使われる優雅な“グラン・パルティータ”や“ドン・ジョバンニ”、そして映画の最後、彼の葬儀の場面で流れる“レクイエム”・・・。

ところで、6月末からNHK-BSで8回にわたり放送された小川糸さん原作のドラマ『ライオンのおやつ』。

「余命を宣告された29才の雫は、美しい島のホスピスで過ごすことを決めた。そこに暮らす人たちとの出会いと友情が、雫にたいせつなことを思い出させてくれる。優しく流れる時間の中で、人生の価値を描き出す物語。」（NHK 番組HPより引用）

限られた時間をいかに充実したものとして生きるかについて、毎回それぞれの人生に重ね合わせ丁寧に描かれる。ドラマでは幼くして生を全うするエピソードもあるけれど、そのタッチはとても温かなものだ。鈴木京香さん扮するマドンナがかけてくれる「よい旅を・・・」の台詞が胸に染みる。

ドラマのなかで、雫は「人生をしっかり生きること」について何度も触れている。

先のモーツァルトの“レクイエム”は“ラクリモサ（涙の日）”の8小節目が絶筆とされる。『アマデウス』でも彼の葬儀の場面で、この“ラクリモサ”が流れる。その作曲の経緯が様々な憶測を招いている側面はあるが、この後、弟子の手が入っているとはいえ、“レクイエム”はモーツァルトの代表作として燦然と輝き、我々の胸を打つ。

繰り返し報道される感染者数や重症者数等・・・。再びの臨時休校となり、生徒がいなくなった校舎では先生方が黙々とオンラインの授業を続けている。ドラマの中で雫がつぶやいていた「明日が来るのが当たり前信じられる」そういった生活がかげがえのない宝物であったことに改めて思い至る。



「人生をしっかり生きること」・・・重い命題だけれど、こんなことを考えながら過ごす日々が続く。